

氷見バイパス関連遺跡調査報告 II

—阿尾島尾 A 遺跡概報—



1993年3月

氷見市教育委員会

表紙 阿尾島尾A遺跡と阿尾城跡（北から・平成4年撮影）

氷見バイパス関連遺跡調査報告 II —阿尾島尾 A 遺跡概報—

1993年3月

氷見市教育委員会

目 次

I.	調査に至る経緯と経過	1
II.	遺跡の環境と概要	2
III.	縄文時代	3
IV.	古代	5
V.	中世・近世	9
VI.	その他	14
	構造概略図	6

例 言

1. 本書は、平成2～4年度に実施した富山県氷見市阿尾字島尾所在の阿尾島尾A遺跡の発掘調査の概報である。なお本報告書は平成5年度に刊行の予定である。
2. 調査は、一般国道160号氷見バイパスの建設工事に先立ち、建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
3. 調査担当者は次のとおりである。

平成2年度：氷見市立博物館学芸員（社会教育課兼務）大野 実
平成3・4年度：氷見市立博物館学芸員（生涯学習課兼務）大野 実
氷見市教育委員会生涯学習課学芸員 鈴木瑞磨
4. 本書の編集・執筆は大野が担当した。
5. 本書の作成にあたり、富山県埋蔵文化財センターの山本正敏・久々忠義両氏、(財)富山県文化振興財団の宮田進一氏から教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

またこの他にも調査を通じて各機関・個人から多くの指導・協力をいただいているが、それらについては本報告書でまとめてお礼申しあげたい。

I 調査に至る経緯と経過

水見市教育委員会は、一般国道160号水見バイパスに係わる埋蔵文化財について、昭和61・63年度に実施した分布調査、及び平成元・2年度に実施した試掘調査の結果に基づき、阿尾島尾A遺跡・阿尾島田A遺跡・三角山城跡・山崎城跡・阿尾瀬戸ケ谷内横穴群の5ヵ所の遺跡の本調査を予定した。

本調査は平成2年度から取りかかり、まず最初に用地買収のほぼ終了している阿尾島尾A遺跡を2ヵ年計画で開始した。しかし平成3年度は、災害復旧工事に先立ち山崎城跡の本調査を急ぎ実施することになったため、阿尾島尾A遺跡の調査を10月で中断し、残りの部分は平成4年度に実施した。

一方出土した遺物の整理は平成4年度中に終了させ、報告書を刊行する予定であったが、遺物が予想以上に多かったことや、他の発掘調査との兼ね合いから予定が遅れたため、本年度は概報の刊行とし、平成5年度に本報告書を刊行することにした。

なお各年度の現地調査期間と面積は次のとおりである。

平成2年度 6月20日～11月6日（実動73日） 1,700m²

平成3年度 5月10日～10月8日（実動89日） 1,600m²

平成4年度 6月5日～11月20日（実動53日） 1,700m²

参照文献

水見市教育委員会 1990 『一般国道160号水見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告Ⅰ』水見市埋蔵文化財調査報告第11冊

水見市教育委員会 1991 『一般国道160号水見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告Ⅱ』水見市埋蔵文化財調査報告第12冊

水見市教育委員会 1992 『水見バイパス関連遺跡調査報告Ⅰ』水見市埋蔵文化財調査報告第13冊



調査風景

II 遺跡の環境と概要

阿尾島尾A遺跡は、市街地北部の阿尾川下流右岸の微高地に所在し、海岸線から約300mの地点に位置する。阿尾川は石動山西側の荒山峠近くに発し、約11kmで富山湾に注ぐ氷見市の主要河川のひとつである。

遺跡の地盤は繩文海進に起因する砂丘であり、その範囲は現在の阿尾島尾集落の範囲とほぼ一致すると推測している。標高は約5mであり、現在は宅地・水田として利用されている。

遺跡の周囲には、ほぼ同時期の散布地である阿尾島尾B遺跡をはじめとして、弥生時代末～古墳時代初めの阿尾遺跡、古墳時代の阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群、中世の阿尾城跡・三角山城跡・山崎城跡・八代城跡などが所在する。本遺跡の周囲は、繩文時代から現在までほぼ連続的に遺跡が営まれた地域といえよう。

遺跡一帯は昭和48年に圃場整備が行われ、包含層や場所によっては一部遺構面までが擾乱を受けている。遺構面は黄色の砂層であり、現地表面から30～90cmの深さで確認した。遺物の大部分は擾乱を受けた包含層からの出土である。



遺跡の位置 (1/25,000)

III 繩文時代

阿尾島尾A遺跡では、まず縄文時代の遺物を確認している。

遺構は少なく、ほとんどが包含層からの出土である。また遺跡全体からみても、縄文時代の遺物の量は少ない。

縄文土器は全て破片であり、元の形に復元できるものはない。早期末～後期のものまであるが、概して前期・中期のものが多いようである。

石器では、今のところ打製石斧1・磨製石斧32・小型磨製石斧9・石鏃26・凹石1・石匙3・石錐7・石槍2・磨製石斧破片40・玦状耳飾2・石棒1・石冠?1・石刀?2などを確認している。また輝石安山岩の剝片も多い。

石材をみると、石鏃はほとんどが輝石安山岩であり、磨製石斧はほとんどが蛇紋岩である。ただし磨製石斧に硬質砂岩製のものが1点ある。

海岸に近い遺跡であるが、網関係の漁撈具と思える資料は出土していない。



縄文土器（1／2）



石器(1) (1/2)



石器(2) (1/3)

IV 古代

阿尾島尾A遺跡の最も中心となる時期である。

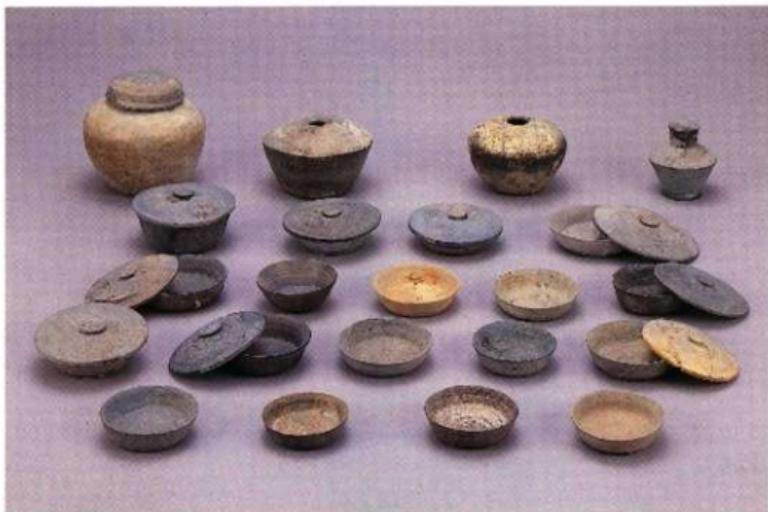
遺構では溝や井戸などを確認している。掘立柱建物もほとんどはこの時期のものと考える。

井戸は、約60cm四方の横板井籠組のものである。溝は幅約30~60cmのものを多数確認しており、一部の溝からは遺物がまとめて出土している。

遺物は7世紀~9世紀のものが出土しているが、大半は奈良時代のものであり、その中でも前半のものが多い。

主なものでは須恵器の杯・杯蓋・高杯・壺・瓶・円面硯、土師器の杯・杯蓋・高杯・壺・鍋があり、土師器の食膳具は赤彩されたものと内黒のものがある。量的には須恵器の食膳具が最も多く、組成の大半を占めると思われる。

また、いずれも痕跡が薄く肉眼では解読できないが、墨書き土器も数点確認している。



包含層出土の土器



阿尾島尾A遺跡主要遺構概略図 (1/500)

- ・主要な遺構を図示した。
- ・建物のうち▲印は近世初、残りの大半は奈良時代と考える。
- ・細い線は奈良時代。
- ・▲印の井戸は中世。
- ・方位は真北を指す。



平成4年度調査区の掘立柱建物群（北から）



遺構出土の土器

V 中世～近世

古代に次いで阿尾島尾A遺跡の中心となる時期である。

遺構では大溝・掘立柱建物・井戸・土坑などを確認している。

大溝は中世後半～近世初め頃のもので、そのほとんどが直角に折れ曲がり、水路だけではなく、土地を区画する役目をもっていたと考えられる。

掘立柱建物には、いわゆる横円柱穴建物のものが2棟あり、近世初め頃と推定している。[#]

井戸は直径約70cmの曲物を利用したもので、中から16～17世紀の木製品が出土している。

次に遺物の概略を示す。

12世紀後半～15世紀前半では、量は少ないが各時期の珠洲（摺鉢・壺・壺）が出土している。ただしこの時期の土師器は確認していない。その一方で12世紀後半の中国製白磁（碗等）、13世紀の中国製青磁（碗等）が若干ある。この時期に属する確実な遺構はなく、性格は不明であるが、中世前半から遺跡は存続していたものと思える。

15世紀後半～16世紀では土師器（皿・摺鉢）・珠洲（摺鉢）・越前（壺・摺鉢・壺・鉢）・白磁（皿等）・青磁（碗・皿・香炉）・染付（皿等）が出土しているが、珠洲・越前は量が少ない。また輸入陶磁器も青磁・染付に比べて白磁は少ない。逆に15世紀の瀬戸（摺鉢・碗・小皿等）・16世紀の瀬戸美濃（摺鉢・天目茶碗・丸皿・ひだ皿等）が増えてくる。また漆器（椀・小皿）も若干出土している。なおS D -12の底から15世紀後半のロクロ土師器がまとまって出土した。これらは法量から5種（19cm・16cm・14cm前後・12cm前後・8cm前後）に分類でき、小型の2種は底部に回転糸切痕を残すに対し、大型の3種はヘラケズリを施す。この他に石臼・硯等の石製品、下駄・曲物等の木製品がある。

16世紀末～17世紀では、越中瀬戸（天目茶碗・皿等）・唐津（皿・壺等）が出土しているが、特に唐津の皿が多い。18世紀以降では伊万里が多い。

註

河西健二 1992 「中世末から近世の建物跡」『埋蔵文化財年報(3)』朝富山県文化振興財團



石臼

—





土師器皿



漆器



ロクロ製土器表面



ロクロ製土器裏面



珠洲・越前 (1/3)



瀬戸・美濃 (1/3)



輸入陶磁器（1／3）



肥前・越中窯戸（1／3）

VI その他

包含層から棒状尖底製塙土器・土製紡錘車・土鉈・滑石製石鋸・古墳時代の須恵器が出土している。



須恵器・筋錘車・土鉈・滑石製石鋸・製塙土器
(1/4)

平成5年3月25日 印刷
平成5年3月31日 発行
水見市埋蔵文化財調査報告第15冊
水見バイパス関連遺跡調査報告 II
—阿尾島尾八遺跡概報—
編集・発行 水見市教育委員会
〒935 富山県水見市木町4番9号
☎0766548215
印 刷 株式会社トーザワ